

特集：卒業生便り

留学体験記

佐野 浩子（筑波大学 生物学類 1997 年 3 月卒業、博士課程 生物科学研究科 2002 年 3 月修了）

私は、2012年4月より、久留米大学分子生物学研究所・講師として勤務しております。研究者の就職は厳しいことに加え、昔とはキャリアパスが変わってきたことで不安が増しているように思います。そんな不安を少しでも和らげることができたらと思います。研究者のキャリアパスの一例として、私がこれまでに辿った道を紹介したいと思います。

■ 筑波大学での9年間

私は1997年に生物学類を卒業した後、そのまま博士課程である生物科学研究科に進学しました。ちょうど「ポストクー万人計画」が始まった頃です。研究資金も増加し、明るい未来を感じさせるような雰囲気がありました。研究がうまくいくかどうかは分かりませんが、博士課程進学のリスクは意識しましたが、人生を棒に振るかもしれないというような悲壮感はありませんでした。幸い良い指導者に恵まれ、大学院生活は充実したものになりました。中でも、時間や効率を度外視した教育を受けられたことをとても感謝しています。例えば、今では外部委託するような実験も自分で行いましたし、論文も自分で書き、指導教官の先生や研究室の先輩のアドバイスを受けながら何度も書きなおしました。このような悠長な歩みを許して頂けたことは幸運だったと思います。

■ ポストク留学

博士課程修了後は、アメリカの研究室に留学しました。希望する研究室があったので、その教授にメールをしたところ、「面接に来なさい」という返事が返って来ました。それまで聞いていたのは、留学していた先輩の後任として行った、メールのやりとりで決めた、学会で会った時に話して決めた、のいずれかでしたので大変慌てました。しかし、ボスやラボメンバーとの相性や、街の雰囲気を確かめることは重要です。ポストクの面接では、2日くらいかけて、研究能力の他、人間性、コミュニケーション能力、語学力などを試されます。このように真剣に人を選ぶことにとても感心しました。

留学した研究室は総勢20人くらいで、当地では大きな研究室でした（研究室の人数はアメリカの方が少ないのです）。メンバーの出身国は約10カ国で、アメリカ人とヨーロッパ人が半々くらい、アジア人は自分を含めて3人でした。このような環境で共通なのは、論理と言葉（英語）だけなので、コミュニケーション能力と語学力の大切さを痛感しました。

仕事自体は、研究ですから日本と変わりはありません。誰にとっても、留学の最大の目的は研究成果を上げることだと思います。しかし、それに加えて、その国の研究システムを理解することも重要だと感じました。まず、留学して思ったのは、研究室が意外と質素だということです。最新機器がずらっと並んでいるよ

うな研究室は滅多にありません。しかし、研究補助員が多く、自分で試薬を作ることも洗い物をするということもありません。また、日本では馴染みのない「ラボマネージャー」という人がいて、研究室の物品管理および学生や研究補助員のトレーニングを行います。このように、機械よりも人にお金をかけることによって、ポストクや学生は研究に専念することができるのです。また、しばらくすると、グラントや教員の採用・評価の仕組み、その背景にある思想なども分かるようになりました。このような情報を輸入するのも留学生の役割ではないかと思います。



セントラルパークにて研究室のメンバーとともに（後列右端が筆者）

■ 就職活動

留学6年目でそろそろ就職を考えようと思い立ちました。日本では、ポストクの進路は大学教員にほぼ限られており、ご存知のように、背水の陣の覚悟でポストク生活を送ります。アメリカでもアカデミックポジションを目指すポストクは必死です。しかし、それ以外のポストクは余裕があるように見えました。というのは、アメリカの大学院教育やポストクトレーニングは究極的に「つぶしがきく」ものなのです。実際、金融やコンサルタントといった一見研究とは関係のない企業に就職する人もいました。また、科学政策の分野でも研究経験者は歓迎されます。公的機関やシンクタンクその他、議員がブレーンのような形で採用することもあるそうです。これは、研究は問題設定と解決の繰り返しで、どこでも応用可能な能力と考えられているからです。私自身は日本の大学に職を見つけたのですが、研究者としてのキャリアが進路の選択肢を広げるということを知り、心強く感じました。

■ おわりに

実験手法はwebで検索できるようになりましたが、考え方や感覚は同じようにはいきません。筑波大学でしっかりと基礎力をつけた後は、敢えて身の程をわきまえずに飛び出すことをお勧めします。全く違う環境に身を置いて、脳みそを柔らかく耕しておくことで、いろいろな可能性が開けてくると確信しています。

Communicated by Fumiaki Maruo, Received January 16, 2013.